

世界の子どもたち vol. 15

写真・文 中西あゆみ



特別編 福島 復興を願って



「原発なくそう。未来のために。子どものために。」9月11日新宿、一万人の反原発デモで叫ばれた言葉です。東日本大震災からちょうど半年。目を覆いたくなるような甚大な被害を受けた東北地方の壮絶な光景は、私たちの心に深く、深く刻まれました。この6ヶ月、一刻も早い被災地の復興と再生が願われるなか、脱原発の気運も高まっています。震災に加え、原発事故や風評被害に苦しむ福島の人々と子どもたちは、どのように現実と向き合っているのでしょうか。

9月初頭の福島県南相馬市鹿島区。穏やかな青空の下、雑草が1メートル近く育ち荒地と化した広大な土地には、多くの漁船が津波で流されたままの状態で放置されています。店のシャッターは閉められ、外を出歩く人の姿は見られず、シンと静まりかえった町。あらためて、ここで起こってしまったことの大きさを思い知られます。唯一の人影は、原発から20キロ圏内警戒区域検問所の前で今でも営業するコンビニエンスストアにありました。防護服姿の警察官が立ち寄っています。また南相馬市立総合病院の駐車場は車でいっぱいでした。数キロ離れると壮大な山脈がそびえ立ち、その美しく圧倒的な自然に囲まれたとき、この地に暮らす人たちが目には見えない恐怖と戦っていることを痛感しました。

外で思いきり走り回ったり、友だちと元気に笑い合ったり・・・。今では、それがごく当たり前ではないという現実。放射線被爆量を測定する線量計を前に下げ生活する福島県の子どもたち。安全を確保するため不自由な毎日を強いられています。

福島市笛ヶ谷にある「ささやのぞみ保育園」は園児92人。今年4月に開園したばかりの新しい園です。開園直前に起こった震災では、真新しい園舎にヒビに入るなどの被害を受けました。震災後、他県に引っ越し家族もいるため、毎月園児の数が変わることです。7月に建設された



1.1、2年生合同の体育の授業。2.外遊びの後はみんな手洗いうがいをする。3.ささやのぞみ保育園の子どもたちが外で遊ぶのは1ヶ月以上ぶり。4.毛虫が大好きな2年生の男の子。5.大石小の子どもたちが首からかけている線量計。6.昼休みに校庭で遊ぶ子どもたち。7.大自然に囲まれた大石小学校。



©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ（フォトジャーナリスト）

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。TIME Magazine誌やHonolulu Star-Bulletin新聞写真部の下などで修業後、現在インドネシアのジャカルタを拠点にフリーランスとして活動。

「子どもたちは、一人ひとりがひとつの人格をもち、生きる権利も自由もある。その環境を周りの大人们がどうサポートするかが大事。大人の思いで子どもたちをどうにかするのではなく、子どもたちがもっている力を十分に育てていくには何ができるのか。それをプラスに考えたい。線量が低ければそれに応じて活動させてあげたいし、そのためにも大人たちが正しい情報を正しく判断できる力をもてるここと、時間と労力は惜しまず、だからこそ支え合っていきたい」。佐藤由弘校長先生の言葉です。日本に大変なことが起こってしまった今、心から復興を願い、自分にできることは何かを考えます。今回、福島で出会った子どもたちと彼らを支える先生方が、偉大なインスピレーションになりました。

仮設住宅から通う子どももいます。現在、給食は県外産の作物が調理され、園で使用する水には特殊フィルターのついた給水タンクを使用しています。外に出られない子どもたちのため、体操教室から運動会の練習に至るまで、屋内ができる限りの活動が行われているそうです。園庭の表土入れ替え作業が終り、この日30分間、一ヶ月以上ぶりに外遊びをすることができました。大はしゃぎの園児たち。こんなに楽しそうな子どもたちを見たのは久しぶりと、先生方は言っています。



「子どもたちは、一人ひとりがひとつの人格をもち、生きる権利も自由もある。その環境を周りの大人们がどうサポートするかが大事。大人の思いで子どもたちをどうにかするのではなく、子どもたちがもっている力を十分に育てていくには何ができるのか。それをプラスに考えたい。線量が低ければそれに応じて活動させてあげたいし、そのためにも大人たちが正しい情報を正しく判断できる力をもてるここと、時間と労力は惜しまず、だからこそ支え合っていきたい」。佐藤由弘校長先生の言葉です。日本に大変なことが起こってしまった今、心から復興を願い、自分にできることは何かを考えます。今回、福島で出会った子どもたちと彼らを支える先生方が、偉大なインスピレーションになりました。